

交響詩「旅路」

この本では「生きる」ということの愛おしさをお話ししたいと思います。そのためには、その反対側にある悲しみ・苦しみなどや、老いても変わらない子供心にも同時に目を向け、それらを背景にすると「生きる喜び、愛おしさ」が浮かび上がってきます。

はじめに

昔の人は今より短命でした。伝染病が流行ると目前で子供や中高年の人があつというまに死ぬことが頻繁に起こったようです。赤ちゃんたちは理由が分からず、無力なまま死んでいきました。多くの人が餓死するときもありました。ときには人の値段がたった葉書一枚の価値の時代がありました。人の世の無常と無情を嘆き、理不尽な運命を受け容れるのが難しい時代が長く続きました。人の命の価値は社会の様子によって変わる性質を持っています。

人の悲しみの深さと比べ、現実の世界は余りにも厳しくてそっけなく、それでいて神は長く沈黙を守ったままでした。これでは人は救われれないと思う人がその時代時代に現れ、救済を見つけようとなりました。人は死や生命に特別の意味づけをしようとして、あの世とこの世を結ぶ物語を

作りました。それが芸術ともなり、宗教観にもなりました。それを見たり、読んだり、聴いたりして、それぞれが自分の思想、死生観を作っていました。神が沈黙しているので、神を探して、必死に救いを求めようとしてきた人々もいたのです。

苦しいときには、神という存在を持ち出し、神様が私達をじつと見つめている、ということ想像するだけで、何か悟るものがあるでしょう。私達が自分を意識しているものとは別に、私達を見守り、自分を評価し、厳しく監視するもう一人の自分が私達の中にあるのです。

高校生の頃です。トルストイの或る小説の中で、馬鹿正直に生き、働いてもいつまでも貧乏で悲惨な状況にあった人が「神は本当にいらっしゃるのか」と嘆いたとき、相手が「神はあなたの心の中にある」と答えた文言が強く印象に残りました。「神は存在するか、しないかを問うことは無意味で、素朴に生き、（非暴力的に）今やるべきことを誠実に行う中に神性が宿る。神の影は心の中に良心として見られる」ということだと受け取りました。

このことを改めて本書で問い直します。

江戸時代末期の慶應三年より、昭和十九年まで、文明開化の混乱の時代に、聖職者として誠実に生き抜いた人物がいました。キリスト教司祭で聖職者としての顔、キリスト教系ミッションスクールの学校校長や大学教授としての表の顔があります。一方、生き抜くうえで避けることのできない、厳しい運命に翻弄された苦悩に満ちた世界がありました。両方を統合させ、彼の生きざまを見直すことで、信仰とは何かが浮かび上がってきます。そして救いとはどういうことかを、ぼんやり思い浮かべていただけたら幸いです。

この本の『交響詩 旅路』は、狸が語る大人向けの長いおとぎ話で、登場人物や組織は架空のものでフィクションであり、同時に音楽の交響詩です。繰り返される創作のトロイカの曲は、人生の転換点のプロムナードをギャロップ（駆歩）で進むテーマ音楽です。

日常の自然世界の中に、注意深く見ると、秘密の広い世界が隠されていることを、これまでの本で記してきました。今回もその延長上にあるものです。